



若狭美浜

はあとふる体験

「特
集」

「体験」を求め、都市から美浜へやって来る子どもたち。彼らが体験するのは、大敷網漁、地びき網、田植え・稲刈り、酪農、溪流釣り、林業体験、ボート、民泊等、さまざまです。体験プログラムの総称は、「若狭美浜はあとふる体験」と呼ばれています。今月号では、その概要や目指しているもの等について紹介します。



観光から「感交」へ

この町が持つ自然や産業、文化、そしてそこに暮らす人々。それら豊かな地域資源を活用した体験を提供し、体験者と交流を深めることで、どこにでもあるものを“どこにもないもの”に変えていく。その思いが、「若狭美浜はあとふる体験」の原点である。

求められる観光の形が変わる中、“美浜ファン”を増やそうと立ち上がった25人。彼らの一歩が、「感交地・美浜」の扉を開いた。

「美浜ファンクラブ」の設立

平成16年7月、町内の農林水産業に従事する方々が中心となり、「美浜ファンクラブ」という組織が設立されました。目的は、美浜にある地域資源を活かした体験を都市住民に提供し、町民と体験者が交流を深める体験型観光に取り組むことで、町の活性化を図ることです。「若狭美浜はあとふる体験」は、ここから始まりました。

ただ見るだけの「観光」から、地域の自然・人との交流を通して感動を得る「感交」へ。旅行者のニーズが大きく変わる中、体験型観光という新たな可能性にかける25人の輪は、徐々に広がっていききました。

「若狭美浜はあとふる体験 推進協議会」へ

平成17年3月、「美浜ファンクラブ」は「若狭美浜はあとふる体験推進協議会」へと発展。農林水産業者や宿泊・飲食施設、物産店、体験インストラクター、行政等で構成されるこの組織が、現在、体験プログラムの提供を担っています。

平成17年7月からは、教育旅



美浜ファンクラブ設立総会で、今後の方針について知恵を出し合うメンバー(平成16年7月1日)

行の受け入れを開始。また、平成19年7月には、協議会と体験希望者を結ぶ窓口的役割を果たすコーディネート組織「NPO法人はあとふる美浜ネットワーク」が設立されました。

町に根付く、「はあとふる体験」

はあとふる体験を目的に町を訪れる人は年々増加しており、平成22年度は6,441人で、これまでに総計2万5千人を超える人を受け入れています。また、体験を支える協議会員の数は、現在では250人を超えています。

当たり前が感動を呼ぶ

若狭美浜はあとふる体験推進協議会 初代会長
(現在・NPO法人はあとふる美浜ネットワーク理事長)

奥井 義弘 さん(興道寺)



はあとふる体験を始めるきっかけとなったのは、平成15年10月に町内の担い手農家が主催で行った農業体験イベントです。中京・関西から50人ほどの親子を招き、稲刈りやイモ掘り、餅つき等を通じ交流したイベントが、後の美浜ファンクラブの設立につながりました。この町の農林水産業者と行政が手を取りあえば、素晴らしい体験を提供できるという思いがありました。

体験型観光を始めて驚いたのは、私たちが当たり前と思っていたことが、感動を呼ぶ材料になるということです。自分たちが日常的に行っていた田植えや稲刈り、時にはそこから見える景色にさえも、都会の人は感動するのです。

私たちが提供する体験で重要なことは、技術の習得ではありません。体験を通してお互いが交流する中で、農林水産業の大変さや大切さに気付いてもらう。そこに、はあとふる体験の真の価値打ちがあると考えています。

体験プログラム

伝えたいのは、この町のありのままの姿。しつらえた体験ではなく、『ほんもの』にこだわった体験。そこからは、感動を糧とした新たな成長が生まれる。

ほんものの体験

「若狭美浜はあとふる体験」では、体験者に美浜町のありのままを伝えることを目指しています。そして、次の項目にこだわった『ほんもの』の体験を提供しています。

○美浜の自然、歴史、文化に根ざしたありのままの自然や暮らしの中で行われるもの

○地域に伝わる先人や達人の経験、知恵、技術を伝え、地域の誇りを伝えるもの

○人と人との出会いを大切にし、体験者と地元の人々との交流が持てるもの

○体験者が五感を使い、主人公となり、発見・感動・達成感が得られるもの

○体験者と地元の双方が、楽しみ・やりがい・生きがいを持てるもの

75のプログラム

はあとふる体験では、合計75の体験プログラムを用意しています。

▼漁業体験

大敷網体験・食体験、地びき網体験・食体験、船釣り体験、たこ漁体験、魚さばき体験、干物作り体験、しじみ漁体験等

▼自然・アウトドア体験

ボート体験、屏風ヶ滝トレッキング(山歩き)、赤坂山ハイキング、溪流釣り体験、森の案内・森の教室等

▼農林業体験

田植え・稲刈り体験、いもほり体験、夏野菜の収穫体験、花の作業体験、酪農家体験、林業体験、炭焼き体験等

▼味覚体験

へしこ料理体験、郷土料理体験

▼工芸・歴史文化体験

わら細工・つる細工体験、まきわり体験、坐禅体験、郷土芸能体験、国古城跡探訪等

※季節によって、体験できないものがあります。

インストラクターと人づくり

インストラクターとは、体験プログラムの案内・指導役となる人です。現在、多くの町民の方が、インストラクターとして各体験現場で、体験者と体験プログラムをつなぐかけ橋として活躍しています。

はあとふる体験は設立当初から、体験者と受け入れ側が互いに成長することを目標にしてきました。ここには、産業だけでなく、人づくりによって、町の活性化を進めていこうという考えがあります。



ボート体験後の反省会で交流を深めるインストラクターと子どもたち

玉井 正典 さん(久々子)

ボート体験インストラクター



ボート体験は、ボートの町・美浜でしかできない貴重な体験です。多い時には、一度に27の艇を出し、130人程の生徒を受け入れることもあります。

私が体験を終えた子どもたちにもいつもお願いするのは、「5人で一つのことをやり遂げたチームワークを、自分が帰った地域でも必ず発揮してほしい。そして、大勢で何かする時は、みんなが率先してリーダーとなり頑張っている。ほしい。」ということです。

はあとふる体験に参加し、今まで気付かなかった美浜のよさに気付くことがあります。体験者から教えられることもあり、自分自身もつと美浜について知りたいと思い、いろいろな人と話したりして勉強するようになりました。

体験者、そしてインストラクター仲間との交流は楽しいです。美浜にいるから、ボート体験のインストラクターになる機会に恵まれた。そう考えると、この町に生まれて本当によかったと思いますね。

この町にいるからできること



溪流釣り体験



酪農家体験



つる細工体験



大敷網体験



ボート体験



ボートを体験して

大阪府吹田市立
南千里中学校 2 年生

大塚 明 さん

ボートを漕ぐのは初めての経験だったので、最初はみんなで息を合わせて漕ぐのがすごく難しかったです。

でも、インストラクターの先生が分かりやすくコツを教えてくれたおかげで、最後のレースでは2位になりました。

この体験を通して、みんなで力を合わせ団結することの大切さを学べました。

教室では見れない表情

大阪府吹田市立
豊津西中学校・教諭

小林 重信 さん



大敷網漁と溪流釣りに引率しました。たくさんさんのスタッフを配置していただき、また1人1竿、1人1まな板と、生徒一人ひとりが自由に活動できるように対応していただきました。

生徒たちは、「めっちゃ楽しかった!」と教室とは全く違う顔をして喜んでおり、こんな授業は初めての経験でした。2日間の体験で、生徒たちは、人や食物、自分を取り巻く環境を思いやる心を学べたのではないかと思います。



民泊体験での夕食

民泊体験

共働きや塾通い等のため、家族と過ごす時間が減る子どもたち。

学校でも人間関係の希薄化が、いじめや不登校といったさまざまな問題を引き起こす。

今、改めて求められる「人とのつながり」の大切さ。

民泊を通して、子どもたちは人の温かさに触れ、今までの自分を見つめ直すよい機会となる。

美浜版「田舎に泊まるっ！」

「若狭美浜はあとふる体験」の民泊（ホームステイ）体験は、美浜のありのままの生活を共にすることで、「田舎の温かさや人とのつながりの大切さ」を伝えたいという思いから、平成20年度から受け入れを始めました。

平成23年3月末現在、簡易宿所登録件数は91軒、約200人の受け入れが可能です。

民泊は、はあとふる体験の人気プログラムで、平成22年度は7校計1,157人の児童・生徒を受け入れました。

民泊の現場

7月6日の夕刻、梅津隆久さん・美和子さん夫妻（菅浜）の家に4人の女子中学生が民泊に訪れます。彼女たちは、大阪府吹田市立豊津西中学校の2年生で、宿泊研修で美浜町に来ました。

挨拶・自己紹介を済ませた後、4人は美和子さんと一緒に夕食作りに取りかかります。刺身、さざえの壺焼き、オムレツ、野菜の煮物、フルーツサラダ等。特別な料理ではなく、梅津さん夫妻が普段食べているものを作ります。

午後7時頃、6人での夕食が



民泊を終えて

大阪府吹田市立
豊津西中学校 2 年生

宮本 佳奈 さん

知らない人の家に泊まるのは初めは不安でしたが、梅津さんが本当の家族のように接してくれたおかげで、すぐにリラックスできました。一緒に作った料理は、とてもおいしかったです。

大阪に帰ったら、私も梅津さんのように人に優しく接していきたいと思います。また、美浜に来ていろいろお話がしたいです。短い間だったけど本当にありがとうございました。梅津さんの家、最高です！



民泊は青少年の健全育成と 郷土の PR 活動

民泊受け入れ家庭

梅津 隆久さん・美和子さん（菅浜）

民泊を始めた当初は、子どもが夜に外へ出て行かないか、何もない田舎を嫌がるのでないか等、不安に思うこともありました。しかし、実際に受け入れてみると、素直な子ばかりで心配は杞憂でした。

民泊は、民宿ではありません。ですから、私たちは、子どもたちに何かをしてあげるのではなく、一緒にしたり、やり方を教えたりすることを大切にしています。夕食はみんなで作りますし、布団は自分で敷くように言っています。その方が、子どもたちの思い出にも残ると思うからです。

民泊を通して、青少年の健全育成が図られます。また、それだけでなく、子どもたちが大人になった時、美浜のよいところを思い出し、再びこの町に来てもらえるよう PR していきたいです。美浜が子どもたちにとって、第2の故郷になってもらえればと考えています。

始まります。地元の食材を使った料理に子どもたちの箸は進み、ご飯を何杯もお代わりする子もいます。中には「お腹が一杯すぎて死にそう。」という子まで。

「女の子だからあまり食べないと思っていたのですが、でも、普通の料理にこんなに喜んでくれて嬉しいですよ。」と美和子さんは笑います。

食卓では会話も弾みます。昼間体験した溪流釣りの話や学校の話、将来の夢等。楽しそうに話す中学生と笑顔で応じる梅津さん夫婦。数時間前に初めて会ったとは思えないほど、食卓は和やかな雰囲気になっていきます。

民泊の現状

民泊協議会の会長を務める隆久さんは、現状を次のように語ります。「『NPO 法人はあとふる美浜ネットワーク』の皆様の PR 活動のおかげで、民泊を希望する学校は年々増加しています。そのため、受け入れ体制が追いつかず、せつかくの希望に応えきれない場合があります。今後は、2 回 3 回と継続して受け入れをしてくれる家庭を増やしていく必要があります。」

「お母さん、ただいま！」

夕食後、4 人と隆久さんは集

落内を散歩します。途中、「海の暮らし館」に寄り、民芸品や精霊船について説明。地域の伝統文化を教えるのも民泊の狙いです。

家に帰ってきた 4 人の口から最初に出た言葉。それは「お母さん、ただいま！」です。1 泊 2 日の間ですが、子どもたちが、ここで新しい家族を得たことは間違いありません。

美和子さんが大切にしているものがあります。それは、民泊した子どもたちに感想を書いてもらった写真つきの色紙です。美和子さんは、色紙を手に言います。「子どもたちが大きくなって、再びこの家を訪れてく



梅津さんが大切にしている思い出の色紙

れた時、この色紙を一緒に見るのが楽しみです。」